白虎魔法対戦記

ハッスル０００

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白虎魔法対戦記

【Ｎコード】
Ｎ０３２９Ｕ

【作者名】
ハッスル０００

【あらすじ】
白虎のコゲンタがネギまの世界に降神される。ここに信頼を司る式神の新たな物語が始まる。
陰陽対戦記と魔法先生ネギま！のクロスオーバー小説です。クロスオーバーが嫌いな方や原作設定ブレイクが嫌いな方は速やかに退場をお薦めします。

第壱話　白虎のコゲンタ見参！（前書き）

私の中では陰陽対戦記はかなりの神アニメと信じております。なので書いてしまいました。なお予定では出演はコゲンタのみとなっております。

第壱話　白虎のコゲンタ見参！

「白虎のコゲンタ！ここに契約を…満了する」

白虎のコゲンタは契約者の太刀花リクとの契約を満了した。

二人に会話は無くお互いを見続けていた。するとコゲンタの体『白虎のコゲンタ』の文字に変わる。そしてコゲンタの文字は空中に展開していた襖の中に消えていく。

そして襖が完全にコゲンタを回収し、閉じていく。これにより太刀花リクの物語は幕を下ろした…

しかし…信頼を司る式神の物語は再び紡がれる事になったのだ。

式神界に回収される筈だったコゲンタだが、途中で何かに呼ばれる様な感覚に襲われていた。

『こいつはいったい何なんだ！？まさか…』

コゲンタにはこの感覚に覚えがあった。
いや式神なら誰しもある感覚だった。

自分は呼ばれているのだ。

コゲンタはそれを悟ると猛禽な笑顔を浮かべる。

「おもしれえ！このコゲンタ様を呼びやがるか…」

コゲンタは心底愉しそうにその声が聴こえた場所に踵を返す。

『こんまんま陸を見守るつもりだったんだけどな…陸は俺が居なくたってやっていける。なんたって俺の…』

友達（ダチ）なんだからよ

コゲンタは声の方に急いだ。

ここは京都の山奥、生い茂った木々は暗い陰を作りある一種の結界にすら見える。そんな森を走る少女と必死に追い掛ける少女がいた。

「せっちゃん～こっちやで～」

「待ってよこのちゃん」

「うちは簡単には捕まらへんで～」

「危ないよー！このちゃんー」

艶やかな黒髪をサイドに纏めて胴着で追い掛ける桜咲刹那とそれから笑いながら逃げる決め細やかな黒髪を綺麗に降ろした少女、近衛このかは森を走り回っていた。まぁ走り回るといっても父の目を盗んで普段はあまり見られない森を見たかったこのかを彼女の友達の刹那がそれを見つけて追いかけているのだ。それから5分後見事に捕獲されたこのかは刹那と共に屋敷への帰路に着いていた。

「今日は楽しかったねせっちゃん」

「うちはびっくりしぱなしやったけど…」

どうやらこのかにとってみれば今日は森を探検でき友達と遊べた一日だったらしい。刹那はそんな能天気なこのかを見て溜め息を吐く。

「帰ったらお手玉しような」

「うん」

二人は手を繋いで山の天辺にある屋敷を目指して歩き出した瞬間だった。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

「きゃあああああ！！」

突然森を揺らす程の音量で何かの叫び声がこだました。このかは突如響いたその音に悲鳴を上げる。刹那はこのかを自分の背中の後ろに隠す。

「このちゃん逃げて！」

刹那は最大限の勇気を振り絞り背中のこのかに叫ぶ。刹那とてまだ幼子、突如出現した鬼や鳥人を怖がるなと出来る筈が無かったが刹那は大切な親友を護るために恐怖を噛み殺した。

しかし襲撃者である鬼にそんな勇気は関係なかった。鬼は有無も言わさずこのかを殺そうとこん棒を振るった。

刹那はこのかを押し倒す様にこん棒の一撃を避ける。凪ぎ払われた木々に抉り取られた大地が刹那の心に絶望を生んだ。

勝てない。

殺される。

刹那はこのかの手を掴んで無我夢中で走り出す。勝てないなら逃げなければ、殺されない為には逃げきらなければ！

このかはそんな親友を見ながら恐怖のせいか涙が止まらなかった。

助けなくちゃ…せっちゃんを助けなきゃ…

このかは刹那をただ一人の親友を護もりたかった。

だが所詮幼子の逃走など鬼にとって恐れることではなかった。

結局、刹那とこのかが辿り着いたのは斜面が急になった行き止まり。

二人の希望に終止符を撃つように傾斜は６０。はあるような

「見付けたで嬢ちゃん」

「！！」

迂回しようと体を回転させた刹那の目の前に地面を砕き、木を薙ぎ倒し現れた怪奇共。刹那は体を強ばらせ、このかは刹那の背中で泣いている。

「このちゃん！」

「いやや、刹那ちゃんを見捨てるなんていやや！」

「だけどこのままじゃこのちゃんが！」

「いやいやいやー！友達見捨てんなんていやや！」

このかは力の限り叫んだ。親友を見捨てんなんて嫌だ！

「大丈夫や、二人で仲良く死ねや」

すると鬼は棍棒を振るう。巻き上がった風によりこのかは吹き飛ばされ、刹那は地面を二転三転このかの近くまで転がった。

このかは刹那を抱き止め刹那は鬼を睨むが鬼は意に返さず棍棒を構える。

どうしょうもないリアルな死の幻覚を見ながらこのかはただ願った…心の限りを込めて！

『お願いします…私はどうでもいいから…せっちゃんを…うちの友

達を

助けて！』

その瞬間。

「な…なんや！」

このかと刹那を中心に世界に無数の障子が走った。

天から地まで不規則に走り続ける障子を見ながらこのかと刹那は呆然と様変わりした世界を眺めていた。

すると突然このかの手に光が現れる。

「きゃ！」

「な！？」

このかは突然現れた光に可愛らしい悲鳴を上げる。

そして恐る恐る手を見ると…

「なんやこれ？」

このかの手には白を基調とした上に黒と青の線が走り小さな鏡がありその上には天の文字がある奇妙な機械が握られていた。

「このちゃん何それ？」

「うちにもわからんのよ…」

このかと刹那が手の機械を弄くり回す。流石は子供。好奇心は旺盛のようだ。そしてそのさい

「動いたら文字が出たで！」

このかが機械を右に動かすと赤い線が走り震の文字が浮かんだのだ。そのままこのかは流れる様に上、左、下に機械を動かす。すると赤い線が走り坎兌離の文字を浮かばせる。

そして離を切った瞬間だった…

突然障子がこのかと刹那に当たる位近くに現れたのだ。

そしてその障子の向こうに一つの影が見える。髪は鬣を逆立たせた様になっており腰からは尻尾がはえている。影になっており顔は分からないが少なくとも人間ではないのだけは確かなようだ。

「てめーらかこのコゲンタ様を呼び出したのわ」

「呼び出した…？うちらが？せっちゃん知ってる？」

「んんん。知らへんよ」

このかと刹那は影に対して首を横に振る。すると影は身を乗り出して詰め寄ってくる。

「はぁあああ！知らねーだと！！？」

「「うん」」

「ふざけんじゃねーぞガキ！てめーがその闘神機（ドライブ）で呼んだんだろうが！」

「これで？」

「そうだよ！」

影ことコゲンタは溜め息を吐いた。

「んじゃ仕切り直しだな。てめーら俺と契約すんのか？」

コゲンタは笑みを浮かべたままだった。

この影の人いったいなんなんや？面白そうな人なんやけど…契約ってなんなん？

「せっちゃん？契約って何？」

「えっ？うちも分からんよ…」

「そっか…」

どうしようこの人？そうや思いきって聞いてみよう。

「契約ってなんの契約なんよ？」

「だからてめーらの願いを俺が叶えんだよ。まぁこのコゲンタ様にしてもらいたい事を言えや良いんだよ！」

「成る程…」

「このちゃん危ないよ！信用できるわけでもないし！」

せっちゃんが身を乗り出して私と影に入り込む。すると影の人は不服そうや。

「てめー、この信頼を司るコゲンタ様が信用できねーだと？」

どうやら影の人はせっちゃんの信用できないちゅうのに腹立てとるみたいやな。だけどそれっていい人ちゅうことなんちゃう。

「せっちゃん謝って」

「だけどこのちゃん…」

「良いぜ…俺と契約すんならおめーらの願いをぜってー叶えてやる！この白虎のコゲンタの名に賭けて！だから契約しやがれ！」

て言われても……そうや！！

隣でせっちゃんもピカーと来たみたいや。

「せっちゃんを助けて！」

「このちゃんを助けて！」

・・・・・・

「……わりーが俺は人助けは……」

突然影の人が黙り出した。どうしたんやろ？

『へっ…リクとの出会いもこんなんだったよな…コイツらもリクみてーに他人の為に願うのかよ…』

「…わかった助けてやるよ。で、具体的に何して助けんだ」

「それは…」

何だガキが黙り出しやがったな…何なんだ？

「あの…戦えるんか…」

ああ…成る程…外に居る下級の式紙共は敵か…で、コイツらは俺が雑魚共に負けんのが怖いと…ああ…

「俺は闘うことしかできねー…だからあいつらを倒せって言うなら瞬殺してきてやるよ…」

「だけど…」

まだ信頼されてねーのか…

「契約すればてめーらは助かりしなければ死ぬ。さぁどっちがいい」

「…このちゃん…」

「わかっとるよせっちゃん……契約します」

「へっ…なら高らかに名を叫びな！白虎のコゲンタ様ってな！」

「…コゲンタ…」

「ちいせーな。もっと叫びな！」

「……」

成る程コイツ今まで非日常を経験してねーな。だからこえーのか…

「……このちゃん…大丈夫や、うちが付いとるから…」

「……うん」

二人とも震える手を重ねて勇気を振り絞るか…

「白虎のコゲンタ！契約する！！」

へっ！やってやるよ！

「呼び捨てか…承ったーーー！！！」

水の上に列になった鳥居を越え、いくつもの障子が開き奥から黄金

色の球体が飛んでくる。それは障子を抜け右手、左手、両足、最後に両腕で球体を真っ二つに引き裂く。中からは信頼を司る白虎族の式神が名を叫び現れる。

「白虎のコゲンタ！！見参！！」

第壱話　白虎のコゲンタ見参！（後書き）

次回は設定です。感想指摘有りましたら遠慮なくお願いしますm（
　　）m

番外　コゲンタ設定の巻（前書き）

パラメーターはｆａｔｅ風です。これが一番書きやすいので…

番外　コゲンタ設定の巻

白虎のコゲンタ

節季・秋分

属性・地

信頼

白虎族

ステータス

筋力　B＋

俊敏　A

耐久　B

妖力（魔力）　B　（契約者のこのかが完全に魔力を扱えてないため低い。このかの成長によって力も上昇する）

能力

意地A＋

意地が凄い！かなり凄い！要約で諦めがかーなーりー悪い！

猫科A
本人は虎だと言い張るが猫じゃらしを見ると遊び出す。熱いのが苦手。

妖力察知
妖力に敏感で式紙や妖怪などの位置を特定できる。魔力については本人曰く甘ったるい香りがするらしい。

必殺技

弧月拳舞(こげつけんぶ)ランクB
印・震(しん)↓、坎(かん)→、兌(だ)↑、離(り)←
コゲンタの体を三日月型の光に変え敵を攻撃するコゲンタの基本の必殺技、使用魔力は必殺技の中で一番少ないがその分威力が低い。

怒濤斬魂剣(どとうざんこんけん)
印・離(り)←、震(しん)↓、離(り)←、兌(だ)↑
西海道虎鉄に妖力を纏わせ敵を一刀両断するコゲンタお気に入りの必殺技、西海道虎鉄を使っている時に使用出来る西海道虎鉄専用の必殺技。威力は高いが接近戦用の必殺技なので空中にいる敵や水中では使用出来ない。

百鬼滅衰撃(ひゃっきめっすいげき)
印・離(り)←、坎(かん)→、震(しん)↓、震(しん)↓
コゲンタの体から虎のオーラを発射し敵を倒す必殺技、威力は必殺技の中でもかなり高く遠距離に対応した技で接近戦だと隙が大きいため使用は出来ない。

酔無縛天之舞（すいむばくてんのまい）
印・兌（だ）↑、坎（かん）→、離（り）←、震（しん）↓
コゲンタを酔わせ酔拳の様な乱舞を繰り出す必殺技、回避にも使用できる。

破軍弧影斬（はぐんこえいざん）
印・離（り）←、震（しん）↓、兌（だ）↑、離（り）←
虎の頭の形の妖気を放つ必殺技、当たった敵を虎の頭が食い尽くす。
しかし対象は少なく妖力をかなり食うため使用は控えめである。

必殺技以外の印

印・兌（だ）↑、離（り）←
筋力上昇　俊敏減少

印・坎（かん）→、兌（だ）↑
俊敏上昇　耐久減少

印・震（しん）↓、坎（かん）→
耐久上昇　筋力減少

印・震（しん）↑、離（り）←、兌（だ）↓
西海道虎鉄

このかが契約した信頼を司る白虎の式神、俊敏さと力強さを兼ね備えた肉弾戦と西海道虎鉄による近接戦闘を得意とする式神、しかし術の類いは使えないため遠距離戦闘は苦手。そのため必殺技には遠距離に対応した技が多く必殺技で弱点をカバーする。しかし必殺技には大量の妖力（魔力）を必要とするため乱射は出来ない。戦闘能力は鬼や鳥人より使役獣としてのランクが高く、タカミチと同ランクの戦闘能力を有している。短気な性格でキレたりするのもしばしばでケンカ早い。しかし自身が信頼を司る式神であるのを誇りに思っておりこのかや刹那を裏切る様な事はしない。闘神師のことを理解しきろうと気負うなど無茶が多い。

用語説明

闘神機（ドライブ）
式神を呼び出せる闘神師の証でコゲンタのドライブは白の虎模様が入っており闘神機が無いと式神を降神させることが出来ない。

闘神符（とうじんふ）
闘神師が持つ特殊なお札。様々な能力を持った闘神符があり闘神師はこれをよういて身を守る。

闘神師（とうじんし）
式神と契約した陰陽師の名称。

魔力と妖力の違い
魔力とは魔法使い達が使用する生命エネルギー。よって魔力が枯渇

すると魔法使い達は自己防衛本能により気を失いこれ以上の枯渇を阻止する。力としては妖力と大差無く妖力を必要とするのは式神と式紙位しか居ないが魔力は魔法使いや一般的な陰陽師は魔力が必要になる。コゲンタに対するこのかの妖力提供はこのかの魔力がコゲンタに提供される際に妖力に変換されている。

番外　コゲンタ設定の巻（後書き）

コゲンタは大分強いですがチートは無し。理由としては私がチート無双があまり好きでは無いからです。

第弍話　必殺！弧月拳舞！（前書き）

遅筆な作者ですが頑張ります。しかし必殺技の描写がムズすぎるます。どうしたらいいでしょうか？

第弍話　必殺！弧月拳舞！

式紙達は突然現れた襖の中に逃げてしまったターゲットを殺すため襖に包まれた空間を棍棒や剣で破壊を試みていた。しかし襖の空間は皺一つ入らず式紙達はホトホト困り果てていた。

「なんやけったいな結界やな。固たくて敵わんな」

リーダー格の鬼が手に持った巨大な棍棒を振るいながら愚痴を溢す。周りの鬼に鳥人は頷きながら攻撃を繰り出す。

そして彼らが攻撃を開始して3分経った時

ピキピキ

傷一つ着かなかった結界に皺が入ったのだ。式紙達は歓喜に包まれた。見る見る内に結界に皺が走っていくのを眺めながら式紙達は再び弱いもの殺しに興じれると笑いが漏れる。

そして結界が完全に砕け散る。式紙達は二人の少女しかいないはずの空間を見た瞬間だった。

「契約だ！てめーら潰すって約束しちまったからなー！！だから元居た場所に惨めに引き返せ！！」

鬼が死んだ。

式紙達は目の前に君臨する存在を認められずにいた。さっきまで自分達は確実に捕食者だったのが一転、狩猟者(ハンター)から狩られるのを怯える獲物に変わっていたのだ。目の前に君臨する存在は自分達とは生物としての格が違う。圧倒的な妖気に放たれる殺気がそれを語っていた。鬼と言っても彼らは紙を媒体にして召喚された式紙であり鳥人も同じだ。しかしコゲンタは違った。コゲンタは式神界に住まう神の力の化身である。他かが人間が作った存在と神に作られた存在では格の差も歴然であった。

「おらおら!!さっさと消えてなくなりな!」

コゲンタは拳で鳥人の腹を抉る様にスクリューパンチを撃ち込む。鳥人は体を貫かれ絶命する。

コゲンタはそのまま鬼の集団に飛び込み蹴りと拳のみで鬼を殲滅していく。その姿は獲物を喰らい尽くす虎である。

鳥人はそれに恐怖し体を硬直させてしまった。それを虎は見逃さなかった。

集団を飛び出し弾丸の様なスピードで鳥人目掛けて拳を放つ。そのまま拳を離し回し蹴りで止めを差し蹴りの反動と妖気のブーストで再び集団の中に入り込む。

その暴君の如し圧倒的な力の差を見せるコゲンタをこのかと刹那は呆然と見つめていた。何せさっきまで自分達を殺そうとしていた鬼達が次々に消滅していくのだ。それは子供にとっては余りに幻想的な光景であった。

「コゲンタ…凄いね…」

このかはさっきまではコゲンタの心配をしていたがこれを見せられればそれもバカらしくなり今では生来の図太さで観戦モードにシフトしている。刹那は一応このかを守るように立ってはいるがその視線はコゲンタに釘付けになっておりあまり意味を成してはいない。

「やってられっか！」

そんなコゲンタから逃げ出すように鳥人はこのかと刹那目掛けて飛翔する。先にターゲットを殺す腹らしいが…

「おいおい、どこ行ってんだてめ…」

「あ…ああ…」

鳥人は背後から聞こえた死神の囁きに体を停止させる。次の瞬間だった。

「ぎゃあぁアアアアアぁアぁぁぁアあ！！」

コゲンタはその爪で鳥人の翼をもぎ取る。鳥人は断末魔の悲鳴を上げて消滅する。

スタッ！と地面に軽やかに着地するコゲンタ。目の前には未だ数だけは立派な式紙達。

『数だけは立派なもんだな。こんまんまやっても勝てるは勝てるが時間が掛かるし彼処に隠れてる召喚師消さねーとまた増えるしな…』

コゲンタは持ち前の嗅覚と察知能力で既に召喚師の位地は把握していたがここにいる奴等を放置したらこのかと刹那が狙われてしまうためコゲンタは気付かない振りを続けているのだ。

『こんまんまじゃ埒が空かねー…ここは！』

「このか！」

「は、はい！」

「印だ！印を切れ！」

コゲンタは裏拳と回し蹴りで鬼を吹き飛ばしながらこのかに叫ぶ。しかし当のこのかは印だの何だの言われても理解できる筈なく小首を傾げてしまっていた。

「必殺技の印だ！俺を呼ぶとき切っただろうが！」

コゲンタはこのか目掛けて怒鳴り散らす。するとこのかはうんうんと頷きながら一呼吸置いて言った。

「忘れた」

「アホかーーーー！！！！！」

コゲンタは腹一杯吸った空気を吐き出してツッコム！隣の刹那もガクッ！と転けてしまう。

「なんで忘れんだよ！リクだって覚えてたぞ！」

「だって適当に動かしとっただけやもん。綺麗な線やな～て眺めとっただけやもん。な～せっちゃん」

ギクリと急に話を振られた刹那。

「えーと、その～…たぶん？」

「なんだそれ！？なんで俺はそんな奴に呼ばれたんだ！」

コゲンタは長期戦にもつれ込み、更には必殺技も使えないのは流石のコゲンタでも不味い。

『弧月拳舞で済みそうなんだが…』

弧月拳舞はコゲンタの必殺技の中では初級の技で最初に使用できる必殺技だ。大量の敵にも対応でき使い勝手も良いのだが威力は他の必殺技に比べれば見劣りしてしまうがそれでも優秀な必殺技である。

「しかたねー！」

コゲンタは小さく舌打ちして不満をリセットする。このままイラついた状態で闘っても不利になるだけだからだ。

コゲンタは鬼の足を掴み蹴りで体勢を崩し肘を鬼のだだっ広い背中に叩き込む。鬼は腰を砕かれ絶叫を上げ消滅する。

すると2体の鬼が棍棒を左右から振り回す。コゲンタを挟んで潰すつもりみたいだ。

「んなもん効くかよ！」

コゲンタは上空高く跳びそれを避ける。そのまま鬼目掛けて跳び膝蹴りを放ちその場を離脱する。

その時このかと刹那は必死に印を思いだそうと奮闘していた。

「なんやったけ…右からやったような気もするな」

「最後は確か下だったと思うんやけど」

このかは手に握られた闘神機(ドライブ)を左右に振りを記憶を探る。刹那もこのかの隣で記憶を探る。

「えーと確か最初が右で」

このかが闘神機(ドライブ)を右に振る。すると青い線が走り震(しん)の文字が浮かぶ。

「こっから上で」

更に青い坎(かん)の文字が走る。

「んで左」

続けて兌(だ)の文字が浮かぶ。

「んで最後が…」

「「下や！！」」

最後に闘神機(ドライブ)を下に振ると離(り)の文字が浮かび上がる。

すると４つの印がコゲンタに向かって飛んでいき別の漢字がコゲンタに入る。

コゲンタは式紙達から距離を取り印を受ける。

「よくやったぜ…このかぁああ！！」

コゲンタは式紙達目掛けて走り出す。爪で切り裂くように腕を広げて式紙目掛けて跳ぶ。

「必殺！！弧月拳舞（こげつけんぶ）！！」

コゲンタの体が複数の三日月型の刃になり式紙達を切り裂いていく。

そして式紙達を全ての刃が通りすぎると式紙達の背後に弧！月！拳！舞！と文字がダンダン！！と音を立てて浮かび上がる。

式紙達は悲鳴を上げることすら叶わず全て消滅した。

しかしコゲンタはここでは止まらず直ぐ様自慢の俊敏さで式紙を召喚していた召喚師まで距離を詰め余りの恐怖に錯乱したのかコゲンタ相手に背を向けて一目散に逃げ出す。

コゲンタはそれの頭を掴む。ギリギリと頭蓋骨が陥没していく音を立てながらそれは情けなく失禁して失神した。

『こいつのせいでこのかは非日常に巻き込まれたんだよな…なら…』

コゲンタはそれを握り潰す為に力を込める。しかしコゲンタは指が

頭蓋骨を貫通する寸前で力を抜いた。それは滑り落ちる様にコゲンタの手を抜けると地面に干からびた干物の様に地面に落ちる。

『こいつが死んだらきっと悲しむんだよな…あいつらは…』

コゲンタはそれの腰をつかんで持ち上げ肩に担いでこのかと刹那の元に向かって再び走り始めた。

「凄いねコゲンタ！強かったんだね。なーせっちゃん」

「うん。本当に凄かったよ」

はー、呑気なもんだなガキってのは…さっきまで死ぬ思いだったのにそんなんを一切感じねー。しかしここまで素直に誉められたら流石に照れるな…

「まーな、俺は白虎のコゲンタ様だぜ。約束はぜってー守るからな」

取り合えず強気で返してみた。声裏返ってねーよな…不安だ…

『コゲンタ照れとんのかな…？顔が赤いで』

「んでこっからどうすんだ？」

「へっ、それは…そうやお家に帰らんと！」

「そうやった！」

ん？急に慌て出してどうしたんだ？

「実はなうちら家から抜け出してあそんどったんよ。だから家に戻らんと」

「なーるほど、了解したぜ…って俺居て良いのか？」

「「あ」」

「どうなんだ…？」

空気が重苦しいな…

「猫拾ったってことにしたら…」

「「無理だろ【やろ】！」」

刹那と声がハモる。あー、名前は結界出る際に聞いたんだ。

「まぁ直前くらいまでな……」

「？どうしたんコゲンタ？」

「腹でも痛めたのか？」

この…匂いは…

「敵か！！」

匂いの元は木から飛び出てきた。

ガギィーン！

空中で響き渡る鉄のぶつかる通常の太刀より長い野太刀と手甲が火花を散らしてぶつかり合っていた。

コゲンタはそこから顎目掛けて平手を突き出す。相手はそれを空いた左腕で受け止め距離を離す。ぶつかり合った影は地面に着地しコゲンタも地面に着地する。

「てめー…なにもんだ？」

コゲンタは殺気を飛ばしながら相手を睨む。飛び出してきた影も殺気を出しながらコゲンタに問い掛ける。

「君こそ何者だい？」

そう言い放った瞬間地面がはぜた。

コゲンタの拳と相手は野太刀が再びぶつかり合う。

コゲンタは野太刀を避けながら懐に入るために前進を続ける。

無手と武器の闘いは間合いの詰まれば間合いの取り合いだ。無手が以下にして拳の間合いに相手を入れるか、武器の間合いを詰めきれ

ず無手が敗北するのか。

「はぁあああ！！」

コゲンタは妖気によるブーストと己の五感と勘を頼り急激なスピードで野太刀の間合いを犯していく。

「ふっ、はぁあ！」

しかし相手も負けずと華麗な太刀捌きでコゲンタの体に傷を付けていく。

コゲンタは回し蹴りの体勢に入る。腰を落とし後ろ足に力を込める。しかし相手はそれを見て過激だった剣制が更に鋭くなっていきコゲンタの前進を許さない。

コゲンタは相手の実力に舌を巻いていた。人間とは思えない太刀捌きに相手の体からみなぎる闘気に不謹慎ながら興奮を感じていた。

しかしコゲンタの目的はこのかと刹那を守ることだ。常に視界にこのかと刹那を捉えながら闘っていた。

するとコゲンタは何かこのかと刹那が叫んでいるように見えたがどうでも良いかと考えはしなかった。

コゲンタと飛び出してきた影の闘いは闘いを知らないこのかにすら分かるほど激しさを増していた。

そんな中このかと刹那はずっと二人に制止の声を上げていた。

「コゲンター！闘ったらいかんよー！」

「長さまもそれは敵じゃ無いんでーす！」

そう、なんと飛び出してきた影は関西魔術協会の長にしてこのかの父の近衛詠春なのだ。

しかし自分達の話など聞く耳も持たない二人は更に激しくぶつかっていた。

このかと刹那は大声で呼び掛けるも止まない衝突音がその声を掻き消してしまっていた。

「どうしょう、せっちゃん？」

「どうって言われても…何とか気付いて貰うとしか…」

「けどあんなか入るんの？」

「……無理や」

うーんと顎に手を当てて考え込む二人。そんな二人は知らんとばかりに闘う二人。

すると悩み続けた刹那の頭上に電球が光った。

「そうや！コゲンタはウチらと契約してるんよな。ならこの機械を使えばコゲンタを止めれるかも」

「名案やでせっちゃん！えーと～」

ペシペシと闘神機（ドライブ）を叩きだすこのか。しかしコゲンタは止まらず闘い続けている。

「どうやんやろ？此れかな？」

次は刹那が闘神機（ドライブ）を振り回し出す。その際に印は出現しなかった。どうやら正しい印ではなかったみたいだ。

「こうなったら…閉じるんや」

「え！？閉じて大丈夫なのかな」

「もうこれ以外方法が無いんや！いくで！」

「う、うん」

二人はドキドキしながら闘神機（ドライブ）を閉じる。

すると

「ん？なー！？」

闘っていた筈のコゲンタが消滅したのだ。

「へっ？」

詠春も突然敵が消えて肩透かすをくらい地面に着地する。

「お父さん。コゲンタはうちらの味方やで」

「そうです長！コゲンタは私達を助けてくれたんですよ」

「え、ええ？」

詠春は助けた筈の子ども達に責められて訳が分からないとポカーンとしている。

『何しやがんだこのか！！これからだったのによ！』

このかは突然背後に現れたコゲンタにビックリしながらもヒッヒッフー。と深呼吸してコゲンタに向き合う。今のコゲンタは少し透けておりまるで幽霊のそれと同じ雰囲気を出している。

「コゲンタも謝って！」

「なんでだよ！？俺はお前らあの敵から守るために…」

「あの人は敵や無くて私のお父さんや！」

「……は？」

「だから私のお父さん！」

「……マジか？」

「マジよ」

「……」

黙り込んでしまったコゲンタの隣では詠春も刹那に事の経緯を刹那から聞き頭に手を当てていた。

「ほら、仲直り仲直り」

このかは闘神機(ドライブ)を開きコゲンタは再び召喚される。

「……」

「……」

「早く早く」

「仲直りやで」

何を言って良いか分からなくなったコゲンタと詠春は！

「すんません」

「すいません」

取り合えず謝った。

コゲンタの初バトルはなあなあに終わりを告げるのだった。

第参話　友との約束！！（前書き）

gd gd感ｍａｘですがすいません。

第参話　友との約束！！

「では君はこのかと刹那君に呼ばれた式神だと…」

「あぁ…気が付いたら引っ張られてな…」

あの後このかと刹那によって闘いは止められコゲンタは闘神機(ドライブ)と詠春は何とか和解し、このかと刹那がこれまでの経緯を説明しコゲンタが自分は何者なのかを説明し今に至っている。

詠春もコゲンタがこのかと刹那を助けたと聞いてコゲンタに対する警戒を解いた。

そしとコゲンタは詠春達にここは何処なのかを聞いた。

詠春の話では此処は京都の関西魔術協会本部と言う場所らしい。しかしコゲンタの記憶にはそんな協会等知らず、コゲンタは詠春に闘神師を知っているかをたずねるが詠春は首を横に振った。

しかしコゲンタからしたら陰陽師と闘神師は密接な関係があり、陰陽師の総本山のリーダーたる詠春が知らないのはおかしいと式神について聞いたが伝承すら残って無いのが判明する。

「つまりここには闘神師や式神なんかが存在しねーのか…」

「えぇ…コゲンタ君の話は私すら聞いたことのないものばかりでしたしね」

コゲンタと詠春は向かい合い状況を確認する。

この部屋にはこのかや刹那は居らず、周りは詠春の部下の魔法使いの結界が張られており音漏れはせずこの空間の音を聞けるのはコゲンタと詠春のみである。

「それでは本題に移りましょうコゲンタ君」

「…だな…」

「では君はこれからどうしますか？」

これがこの会合の本題である。

「私としては君にはこのかとの契約を切って欲しい」

詠春はコゲンタから目を反らさず真っ直ぐ言い放つ。

「…何でだ」

「私はこのかには魔法等とは関わって貰いたく無いからです。君と一緒に入ればこのかは魔法とは無関係では居られなくなります」

詠春ははっきりとコゲンタの存在はこのかの害になると言い放った。

しかしコゲンタにも信頼を司る式神としてのプライドがある。

「やだね。俺からしたら関係ねーし、勝手に俺を喚んだのはこのかだ。理不尽にも程がある」

「それは…そうですが」

「それにだ」

「…何でしょうか？」

「このかと刹那と契約したんだ。てめーらを護る…てな」

コゲンタは意志の籠った瞳で詠春を睨む。コゲンタの譲れないプライドは契約を途中で破棄し、約束を破る事だ。信頼を司る式神としてそれだけは譲れなかったのだ。

「しかし…君が居たらこのかに危険が及びます。やはり君を許容する訳には…」

「俺がいなけりゃこのかと刹那は間違いなく死んでたぜ…なら俺が残ってこのかを護る方が安全じゃねーのか！！」

コゲンタは身を乗り出して詠春に掴み掛かる。その目には不信と怒りが入り交じっていた。

「俺が居なくなってもこのかが自由に…そして安全に暮らせるって言うなら俺は確かに不要だし疫病神かもしんねー…けどな！！てめーらがこのかと刹那の安全と自由を約束しねー限り俺はこのかと刹那から離れる気はさらさらねー！！！！」

「くっ…それは」

「どうした。親なんだろ…このかを、刹那を護るんだろ…なら言えよ！約束しろよ！！このかと刹那の自由と安全を！！」

コゲンタは掴みかかった腕を震わせながら力の限りに叫ぶ。そこにはそれを誓えと言うコゲンタの意思が灯っていた。詠春はその瞳を見据えながら声を出す。

「…それは約束出来ません…」

「なっ！」

詠春から返ってきたのは否定だった。

「私はやはりこのかには幸せに生きて貰いたい。ならある程度の監視は行います。それに此れからは常にボディーガードを着けます。ですので君との約束は出来ませんし君は邪魔だ。即刻消えて貰いたい」

「てめー！！それでも親か！！」

コゲンタは襟を掴んでいた右手を離し詠春を殴る。

詠春は僅かに呻き声を上げるがそれを受け止めコゲンタに向き直る。

「はい、私はこのかの親です。私はこのかの未来を護らなければならない！！その為なら如何なる行いだってします！」

「このかはうんなの望んだのかよ！ちげーだろ！！短い付き合いってか、今日会ったばかりだからよくわかんねーけど…けど！！今回このかと刹那が危険になったのはこんな山奥にずっと閉じ込められてかじゃねーのか！！ガキの気持ちを考えてやれよ！！」

「しかしこれが一番安全な方法なのです！」

「そんなにてめーはこのかの未来を壊してぇのかよ！！！」

「違う！私はこのかの未来を護るために動いています！！」

「自由のねぇ未来に価値があんのかよ！！いや！そんな未来に価値なんかねぇー！！！俺の知ってる親ってのは厳しくて…でも優しい奴だった！！子供の自由と安全の為に自分の未来まで賭けた！！あんたにそれが出来んのかよ…ガキの自由を押し潰すのを容認してるてめーに出来んのかよ！！答えろ詠春！！！」

コゲンタは涙を流し詠春に訴えかける。

「じゃ…どうすれば良いんですか…このかを確実に安全に暮らさせるにはどうしろと言うんですか！！」

詠春も散々悩んでいたのだ。こんな風にこのかを閉じ込めていることに、しかし今の関西魔術協会の状況や長としての責任等が詠春を苦しめていたのだ。

「俺に頼れ！！俺が必ずこのかと刹那を護る！！この白虎のコゲンタの名と命に掛けてあんたと約束する！」

「しかし…いや……そうですね。このかには自由に生きて貰いたい。これは確かに僕の本心です。コゲンタ君、このかと刹那君を護って下さい…お願いします」

詠春はコゲンタに頭を下げる。

「白虎のコゲンタ…ここに誓いを立てる。我が命を賭けて近衛この

か、桜咲刹那の式となりその身を護り通す！」

コゲンタは片足立ちになり右手を胸の前に掲げ誓いを立てる。

ここにコゲンタはこのかの式になる事を認められた。

「おとおーさーん、コゲンターー、どこおんのー」

「このかちゃん待ってよー」

コゲンタが誓いを立てていた頃、外ではこのかと刹那がコゲンタと詠春を探していた。

二人は廊下を走り、襖を越えて詠春の部屋を目指す。そしてこのかの手にはしっかりと闘神機（ドライブ）を片手に持っている。

「コゲンターー、遊ぼー」

このかはさっきまで命を狙われていたのも忘れてコゲンタを探す。

それだけ闘っているコゲンタの姿に安心できたのだろう。

そして二人は詠春の部屋に着く。しかし部屋に結界が張ってあり中には入れない。

「むー、空かんよ」

「このちゃん、危ないから触らない方が…」

「いや、ここにコゲンタはおるんや」

「このちゃん…」

二人はしばらく詠春の部屋の前で立ち往生していると突然スーー、という音と共に詠春とコゲンタが出てきた。

「コゲンタ！」

このかはコゲンタの足に抱きつく。

「おーと…」

コゲンタは突然のダイブに少々ビックリするが倒れることなくこのかを受け止める。

「ははは、コゲンタ君は本当にこのかになつかれていますね」

「…／／／」

詠春もそんな光景に笑顔を浮かべ、刹那はもじもじしながらこのかを羨ましいそうに見ている。

「なあ、このか、刹那」

コゲンタはこのかを離しこのかと刹那の目線まで腰を下げて突然口を開いた。

「ん？どうしたんコゲンタ？」

「…黙って聞いて貰いてーんだ」

「……」

コゲンタの真剣な目にこのかと刹那は口を閉じてコゲンタの言葉を待つ。

「俺は式神だ。人間じゃねーのはお前らだって分かっていると思う。そんで俺は闘う為の存在だ。だからお前らと契約であるこのかと刹那を護れって言うのは闘う事でしか出来ない。だから俺がお前らと一緒に居るてことはお前らはまた危険に巻き込まれるかもしれない。そんなの嫌だろ。だからここで俺との契約を解除すりゃあお前らは争いに巻き込まれないかもしれない。こんな争いの種と一緒に居たいか？」

コゲンタはここでこのかに契約の解除したいと言われても仕方ないと感じていた。それもこのかの意思なのだからそれを尊重するつもりだ。

するとこのかは何かを察した様な目をした後

「…コゲンタ…分かった…契約を…解除します」

契約の解除を容認した。

「「なっ！？」」

そのこのかの答えに驚愕する刹那と詠春。詠春はこのかの事だから

契約の解除なんて嫌や。と答える予想していたのだ。

「…そうか…」

「このちゃん何「やから！！」？」

刹那がこのかに問いただそうとするとこのかがその声をかきけして叫ぶ。

「だから新しく白虎のコゲンタとずっと一緒におる契約を結ぶ」

このかは吹っ切れた様な笑顔で告げた。

「……」

一同が唖然とするなかこのかは言葉を続ける。

「護るちゅう契約で闘うことしかできへん言うならそんな契約解除や。だから新しくずっと一緒に遊んだり話したりしたいんや…もしコゲンタと一緒におるのに努力が必要言うなら、うちは頑張るし強くなる」

このかはしっかりとコゲンタの目を見据えてはっきりと宣言した。

『まさかこんな化物とダチに成りたがるバカがこんなに居るとはな…』

「分かった。白虎のコゲンタ新たに近衛このか、桜咲刹那とずっと一緒にいる。契約を結ぶ！後悔すんなよ！」

コゲンタはこのかの式神となった。
外は秋の香りに包まれ始めていた。

第参話　友との約束！！（後書き）

感想、指摘まってます。

閑話1　刹那の不安（前書き）

遅れてしまいまことにすいませんm（　）m

閑話1　刹那の不安

あれから何度かの季節の変わりを迎えた京都の関西魔術協会総本山、またの名を近衛家の実家では、出会いった時より成長したこのかと刹那、そして今も昔も全く変わっていないコゲンタが居た。

現在三人はこのかとコゲンタに向かい合うように刹那が立っている状態だ。

「それじゃ一本勝負で先に倒した陣営が今日のマグロの刺身をより多く貰えるってことで良いよな」

「うん。構わへんよ」

コゲンタはこのかが持っていた竹刀を片手で上段まで上げて、左手を突きだした独特の構えを取る。

対する刹那は竹刀を両手で握り真っ直ぐ凛とした剣道の構えをとる。

このかは二人から少し離れた場所で二人の闘いの審判を努めている。

二人は睨み合って隙を探そうとする。

コゲンタは竹刀を振りかぶりミサイルのごとく感覚で一気に距離を詰めて竹刀をしならせ振り落とす。

コゲンタには明確な剣の型は無く、自身の勘と身体能力、積んできた戦闘経験にものを言わせる我流である。対して刹那は神鳴流を習い型を取った剣術を扱う。しかし戦闘経験は薄く、実戦も経験不足。

よって勝敗は目を見るまでも無いのだが

「はぁああ！！」

刹那は気合い一閃、縦の軌道を描くコゲンタの剣に対し横凪の一閃をコゲンタの腹目掛けて放つ。その剣速は並の武術家と言えど軌道を見切ることすら叶わないほどだ。

しかしコゲンタは並を越えていた。

「あめぇーんだよ！！」

刹那の一太刀が空しく空を斬る。

しかしコゲンタは後ろに一歩下がることで刹那の制空圏から逃れていた。

刹那はそれを理解すると咄嗟にバックステップで場を離脱しようとするも、放たれた縦の軌道は刹那の努力虚しく刹那の頭を通った。

「また一太刀も浴びせられなかった…」

あの日より長くなった両足の脛を地に着けてがっくりとｏｒｚの体勢に成っている刹那。

初めて会った時は何も出来ねーガキだった癖に今じゃそこいらの妖怪になら遅れを取らないレベルまで成長しやがったのに未だに俺に

一太刀も入れれてない事を気にしてんだろうがこっちとざお前らの式神なんで簡単に負けてやる気はねーから安心しろ。

「うー、マグロまでアンティに出したのに…」

「まぁまぁせっちゃん。落ち着いてな」

二人に呼び出されてもう5年か位経ったが、二人とも精神面は一切と言っても良いぐらい成長が感じられない。確かに変わったは変わったが本質は変わって無い。あの時から変わらず二人とも信じられないくらい純粋に育ったと思う。まぁ、これもコイツらに群がりかける奴等（妖怪や式紙や男共）を俺と詠春達で皆殺してきた賜物だな。

コイツらはあれから普通の小学校なるリクが通っていた学校の年下版に通わせた。これも詠春との約束の一環だ。リクは学校に楽しそうに通っていた。あんな授業が楽しいとは一切思えないが笑ってたし、何より友達を作るのに打ってつけだからな。刹那は最初は嫌がってやがったが何だかんだで楽しんでるようだったな。

ほんとガキの成長は早いな…

「…ゲン…！！コ…ンタ！」

「ん？あぁ、このかか。どうした」

少し考えに耽っちまってたらしいな。このかの声に気付かなかった。

「コゲンタ少しは手加減せんと。せっちゃんがかわいそうやないか」

「は、あんなの全力なんか出してねーよ。俺が全力なんかだしたら刹那が泣いちゃうからな」

「泣かへんわー！！」

刹那は顔を赤くして飛び掛かってくる。

…若干少し涙目じゃねーか既に。

「こ…！これは汗や！涙やあらへん！！」

むきゃー！！という擬音が聞こえてきそうなほどの勢いだな。学校じゃ冷静沈着とか言われてる桜咲刹那はどこにいんだか。

「へいへい。分かった分かった。刹那は泣かねーよ。だから飯食いに行け」

俺はむきゃー！と食い掛かる刹那をスルーして闘神機に霊体になって戻った。

「うー！うー！」

コゲンタに良いように遊ばれた刹那はあれからずーとうー！うー！していた。その姿は愛らしく、コゲンタ君があそこまで過保護にしているのも理解できますねる。

「また一撃も浴びせれませんでした…」

「そうですか…それは残念でしたね」

彼女はコゲンタ君に負けると毎回私の所に来て愚痴を溢していく。それには神鳴流の看板を汚してしまったことに対する負い目もあるようだ。子供はそんなの気にせず笑っていて欲しいのですが。コゲンタ君も貴女方の笑顔を守るために闘っているのに。

「長！私はどうしたらコゲンタに一本取れるのですか！？教えてください！」

「顔を上げてください刹那君。それにそんな焦ったって彼には勝てませんよ」

彼女の小さい頃からコゲンタ君の遠い背中を追いかけている。初めてあったあの瞬間から彼女はコゲンタ君の背中を目標にした。暴虐的なまでな力の化身の姿に。状況も状況でしたから仕方ないと言えばそうですが。最近では何か急ぐように力を求めている気がします。

「……急がないと…急いで強くなれば…私は……」

「何か悩みが有るのですか？私で良ければ聞きますよ」

「……私がコゲンタ位強くならなくちゃ、コゲンタに…置いていかれちゃう…このちゃんやコゲンタの隣に居れなくなっちゃう…」

…成る程…彼女は元々人間ではない。妖怪と人間のハーフ、そんな居場所の無かった彼女に居場所をくれたこのか。そしてその居場所

を守り、自分の目標となったコゲンタ君。そんな2人に置いていかれてしまうかもしれないという恐怖が今の彼女を動かしている。

「大丈夫ですよ。このかもコゲンタ君も君を置いて消えはしませんよ。特にコゲンタ君は君にぞっこんですからね」

私は笑顔で刹那君に答える。

刹那君は不安そうな顔のままだがさっきよりはマシな表情になっていました。

「ご相談に乗っていただきありがとうございます」

刹那君は少し恥ずかしくなったのか頬を赤らめていましたが、あれこそ子供のあるべき笑顔ですね。

「なんだ刹那、詠春のとこに居たのかよ。飯の時間まで後少しだぜ」

コゲンタが刹那を見つけたのは、刹那が詠春の部屋を出て少し経ってからだった。

「すいません。少し相談ごとがあって」

「そうか。まぁ、なんか悩みでもあんならいくらでも相談には乗るぜ」

コゲンタは爪で鼻を擦りながら刹那の前を歩く。
刹那は前を歩くコゲンタの背中を見つめる。
そこには出会った日から目指し続けた背中があった。
「（私もいつかそこに辿り着けるのかな…コゲンタ？）」
刹那の問いはコゲンタには聞こえなかった。

閑話1　刹那の不安（後書き）

次回はなるべく早く書きたいな…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0329u/

白虎魔法対戦記

2011年11月27日01時55分発行